サピアの国際補助言語から見る「国際英語」

塚　脇　真　由

はじめに

今日、私たちは世界から自分を切り離して考えることができないほどグローバル化された社会の中に生きているといっても過言ではない。インターネットの普及により、リアルタイムで世界中の人とつながることが可能な社会の中で、人々が「世界共通語」を求めようとする動きはごく自然な流れなのかもしれない。しかし何を世界共通語として認めるかについては、様々な見解が存在する。それは人類が意識的にせよ無意識的にせよ、言語のもつ巨大な力というものを認識しているためである。

Edward Sapir もこの国際共通語の問題に強い関心を示した人物である。1931年に発表されたサピアの論文である 'The function of an international auxiliary language' は今から約80年前に書かれた論文であるにもかかわらず、今日の国際共通語の問題に今なお役立つ様々な提言をしている。今日、英語がその世界共通語としての地位を獲得していることは言うまでもない。しかしいまだ完全な形での国際言語としての英語（English as an International Language : EIL）は確立されていない。

本稿では、Sapir の国際補助言語（International Auxiliary Language : IAL）に対する見解を再考することから、これからの国際英語の在り方について考察したい。

1．国際英語と日本における英語教育の変遷

はじめに、国際英語とは何かについて取り上げる。言語学者であるSharifianは下の引用にみられるように、国際英語（English as an International Language : EIL）とは異文化コミュニケーションのための英語であると提言している。

> EIL　... rejects the idea of any particular variety being selected as a *lingua franca* for international communication. EIL emphasizes that English, with its many varieties, is a language of international, and therefore *intercultural*, communication.　(Sharifian 2009 : 2)

EILすなわちEnglish as an International Language（国際言語としての英語＝国際英語）は、多様性をもつ英語が、国際的でそれゆえ異文化間のコミュニケーションの言語であるということを強調している。すなわちEILは国際コミュニケーションのための言語であり、国際理解、国際協調を図っていこうとするものをさすのである。EILは、様々な英語が存在する中で、多様性を許容し国際コミュニケーションの手段として使用される英語と定義づけられているのである。

では今日の英語の使用者数とその英語の役割はどのようのものになっているのであろうか。表1にはKachruによる英語の三つのサークルモデルとその使用者数がまとめられている。

Types of concentric circle	The role of English	The number of language users
Inner-Circle	Primary language 第一言語　母語	3億2千万―3億8千万人
Outer-Circle	Second language 第二言語　公用語	3億―5億人
Expanding-Circle	Foreign language 外国語	5億―10億人

表1．Kachru（2008）による世界の英語のモデルと各々の使用者数

英語を第一言語すなわち母語として使用している人々はInner-Circleに含まれ、その人々の数は3億2千万人から3億8千万人といわれている。次に、英語を第二言語すなわち公用語として使用している人々はOuter-Circleに含まれ、その人々の数はおよそ3億人から5億人である。最後に英語を外国語として使用する人はExpanding-Circleに含まれ、その人々の数は5億人から10億人とも言われている。このExpanding-Circleに含まれる人には5億人もの差が存在するが、これは専門家によってどの程度の人までを英語を外国語と使用しているとみなすかについての相違が存在するためにおこる。およそ今日の世界人口が61億人であるため、3人に1人が英語を使用していることになる。このようにInner-CircleやOuter-Circleに含まれる人よりもExpanding-Circleに含まれる人が多く、英語を母語や公用語として使用する人よりも、外国語として使用する人が多いということが現在の英語の使用状況の実態なのである。Expanding-Circleに含まれる人の数はこれからますます増加するため、英語は国際言語としての役割をますます担わなければならないのである。

さて、言語を使用する上で文化は切っても切れない関係にあるといわれている。では言語と文化の間には一体どのような関係があるのだろうか。下の引用はイギリスの人類学者であるエドマンド・リーチからのものである。

> ある種の事物や行為を他のものから区別して一つの類別に分けるため、われわれは（言語的または非言語的）記号を用いるが、その際に「自然のまま」の状態にあってはもともと切れ目のない連続体である場のさなかに、われわれは人工的な境界をあれこれと創りだしているのである。
>
> (E.Leach　1981：72)

リーチは「もともと切れ目のない連続体である場のさなかに、人々が人工的な境界を創りだしているのである」と論じている。私たちが使用する言語ももともとは切れ目のない連続体であり、それを私たちが自分たちの生活様式

や思考、関心の対象などに基づいて際立たせたものを組み合わせて言語を創り出しているのである。そのため文化が変わると思考そして言語が変化するのである。したがって国際英語はそれぞれの文化を大切にしながら、共通語として英語を使用しなければならない。

リーチは自然はほぼ連続体をなしていると指摘したが、下の引用にみられるようにロッシュは自然は全くの連続体ではないということを指摘した。

> Many natural categories are internally structured into a prototype (clearest cases, best examples) of the category with nonprototype members tending towards an order from better to poorer examples. The present study provides further evidence that not all members of a category are equivalent and it adds information concerning the relation between the prototype and nonprototype category members, namely that the best examples of a category can serve as reference points in relation to which other category members are judged.
>
> (Rosch 1975 : 544)

ロッシュは連続体をなしていると思われていた色のスペクトルには特に知覚されやすい焦点があり、焦点となる色はその色のカテゴリーの典型つまりプロトタイプであるということを発見した。私たちは無意識に、色の連続体の中に焦点となるプロトタイプを決めているのである。そのような知覚は言語にも当てはまる。人々は言語の中に焦点となるスポットを決め、それぞれの言語を用いているのである。

人々が言語の中に焦点となるプロトタイプを定めているということの具体例として挙げられるのが、下にみられる Whorf による魚の例を用いた言語と文化の関係性の引用である。

> In Eng the traditional "racy" talk of fishermen is doubtless source of division of fish-name nouns into 2 covert classes with markers (reactances) in the plural formation: 1. 'economic fish' (fish sought by fishermen), plural without -s (trout, bass, cod, mackerel etc.), 2. 'low-grade fish', plural with -s (sharks,

> skates, rays, bullheads, shiners etc.) including "queer" fish, (may be fished for but are not typical prized fish e.g. eels, flounders). ...The native speaker of Eng will pluralize names of fish new to him in accordance with his sense of the cultural placement of the fish.
>
> ("Yale Report" by Whorf in Lee 1996 : 267 – 268)

引用において、Whorf は魚の例を用いて言語と文化の関係性を論じている。英語話者は魚を「利益の上がる魚」と「奇妙な魚を含む商品価値の低い魚」に分類し、それによってその魚の複数形を変化させる。すなわち「利益の上がる魚」の場合、複数形には -s を用いないが、一方で「商品価値の低いもしくは奇妙な魚」の場合には、複数形に -s を用いて表現する。そのため英語話者がはじめてみる魚に遭遇したとき、英語話者は無意識にその魚に対する英語文化的な位置づけの感覚にしたがって、その魚の名前を複数形にする。他の文化の人は必ずしもそうするとは限らない。魚に対する文化的な位置づけの感覚が異なれば、その言語も変化するのである。このように文化や思考は、その使用者の言語に影響を及ぼすのである。

このようにそれぞれの文化を認めた国際英語というものが徐々に浸透していく過程で、日本における英語教育はどのような変遷をたどってきたのであろうか。中西満貴典（2003）は日本における英語教育を三つの段階に分けて考察している。

> 戦後の混乱期を経てやや落ち着きを取り戻してきた一九五〇年代半ばから六〇年初頭にかけて、英語教育界でもっともよく使われたことばのひとつは、「役に立つ英語」であろう。それは英語教育界のみならず、ひろく論壇や実業界においても席巻した用語であった。　（中西2003：173）

> 一九六〇年代になると「国際理解」ということばを用いた英語教育目的論が展開されはじめる。英語教育の意義を「役に立つ英語」の習得とともに「国際理解」に助することに求めることが提唱されるようになった。
>
> （同論文 p.175）

一九七〇年代に入ると、「英米化」は徴つきの表象として疎外されるべき概念に追いやられて、その対立概念の表象「脱英米化」に生命が吹き込まれたのである。また脱英米化は国際化と符合し、「脱英米化された英語」＝「国際語」としてとらえられていくのである。　（同論文 p.178）

中西（2003）の英語教育における三つの段階をまとめると、表２のようになる。

年代	英語教育が目指すべきもの	英語教育における対立
1950m －1960	役に立つ英語	教養　/　実用
1960s －	国際理解	ナショナル　/　インターナショナル
1970s －	国際英語	英米化　/　脱英米化

表２　中西氏による英語教育の三つの段階の分類

まず、第一段階は1950年代半ばから1960年である。この段階は「実用」と「教養」という対立の中で実用的な英語すなわち役に立つ英語というものが求められた時代と特徴づけることができる。次に1960年代が英語教育の第二段階としてあげられている。この段階ではナショナルなものとインターナショナルなものという対立の中で、インターナショナルすなわち「国際理解」をもっと進めていこうという考えが、役に立つ英語の習得とともに求められるようになった。最後に1970年からが第三段階として論じられている。英語が脱英米化しているというとらえ方をしたことが、国際英語の発展に大きな影響を与えたのである。この段階に入ると今までの英米語としての英語教育ではなく、国際語としての英語教育が求められるようになったということがわかる。このように英語教育においても、共通語としての国際英語が求められるようになってきたということがわかる。

２．Sapir の国際補助言語

サピアは今から約80年前、国際共通語をどのように考えていたのであろ

うか。サピアの論文集に収められている、"The function of an international auxiliary language" (1931) という論文の中で、サピアは国際共通語についてのさまざまな提言をしている。サピアは次の引用にみられるように、国際語問題の圏外にいる人は、エスペラントのような人工語よりも、英語のような既存語のほうが国際補助言語として望ましいと考えているということを指摘している。

> It is not uncommon to hear it said by those who stand somewhat outside the international language question that some such regular system as Esperanto is theoretically desirable but that it is of little use to work for it because English is already *de facto* the international language of modern times – if not altogether at the moment, then in the immediate future – that English is simple enough and regular enough to satisfy all practical requirements, and that the precise form of it as an international language may well be left to historical and psychological factors that one need not worry about in advance.
> (Sapir 1931 : 110)

引用に見られるように、多くの人が英語のような既存語が望ましいと考えている中で、サピアはこの考えに強い疑問を感じていた。サピアは国際補助言語として英語のような既存語か、エスペラントのような人工語のどちらが望ましいのかを検証しようと試みた。

ではサピアがこの論文において明らかにしたかったことは何なのであろうか。それは次の引用文の中にみられる。

> It is the purpose of this paper to try to clarify the fundamental question of what is to be expected of an international auxiliary language, and whether the explicit and tacit requirements can be better satisfied by a constructed language or by a national language, including some simplified version of it.
> (Sapir 1931 : 110)

引用の中でサピアはこの論文の中で明らかにしたい二つの点が何であるかについて述べている。まず国際補助言語に何を期待すべきであるかを明らかにすることと、二つ目として特定の考案された言語や国語が、もちろん簡素化された国語の何かの別形をもふくめて、明示的、潜在的要求を十分に満足させることができるかどうかという根本問題を明らかにすることである。つまり私たちが国際補助言語に何を求めるべきかということと、私たちは国際補助言語としてエスペラントのような人工語か英語のような既存語のどちらを求めるべきかということを明らかにしようとしたのである。

では、この問題に対するサピアの結論はいったいどのようなものであったのだろうか。サピアは国際補助言語としてはエスペラントのような人工語が適切であると述べたうえで、まず次の引用文にみられるように、人工語が国際補助言語として非難される原因を指摘した。

> The supposed inferiority of a constructed language to a national one on the score of richness of connotation is, of course, no criticism of the idea of a constructed language. All that the criticism means is that the constructed language has not been in long-continued use. As a matter of fact, a national language which spreads beyond its own confines very quickly loses much of its original richness of content and is in no better case than a constructed language.　(Sapir 1931 : 118)

サピアは引用において、考案された言語に対する非難のすべては、「その言語が長期にわたって使用されていないという点にある」としたうえで、既存語も国際補助言語となれば、固有の境界をこえて、本来の内容の豊富さの大部分を急速に失い、結局考案された言語の事例に等しくなると指摘したのである。内包の豊かさという点で特定の国語よりは考案された言語の方が劣等であると仮定することが、考案された言語の観念を非難することでないということを強く主張したのである。

次の引用において、サピアはなぜ人々が国際補助言語には英語のような既

存語が望ましいと感じるかについての指摘をし、その危険性も予見した。

> Perhaps they confuse the comfort of habit with logical necessity. If this is so – and I do not see how it can be seriously doubted that it is – it must mean that in the long run the modern sprit will not rest satisfied with an international language that merely extends the imperfections and provincialism of one language at the expense of all others. (Sapir 1931 : 112)

サピアは英語のような既存語が国際補助言語として求められるのは、その言語の話者が習慣からくる気楽さ comfort of habit と論理的必然性 logical necessity とを混同しているためにおこると論じた。使い慣れた言語はすべてやさしくて論理的であるという誤解のもとに、英語を国際補助言語として推し進めると他のすべての言語を犠牲にして、特定言語の短所と地方性を単に拡大する国際語になってしまうという危険性を指摘したのである。

最後に次の引用では、サピアはエスペラント語を国際補助言語として選択したときの利点を述べている。

> It is, of course, not the language as such which is sinned against, but the conventions of fitness which are in the minds of the natives who act as custodians of the language. Expression in a constructed language has no such fears as these to reckon with. Errors in Esperanto speech are not sins or breaches of etiquette; they are merely trivialities to the extent that they do not actually misrepresent the meaning of the speaker, and as such they may be ignored. (Sapir 1931 : 120)

上の引用においてサピアは、「もし既存語を国際補助言語とすれば、その言語の管理者として作用する母語話者の精神のうちの適合性に触れた場合、それは礼儀違反となるが、エスペラントが国際補助言語になれば、このような配慮すべき不安はなくなる」と述べ、エスペラントを国際補助言語とすれば全ての人に平等な言語が国際補助言語としてつくられていくと提言したので

ある。

ではサピアの理想的な国際補助言語とは何なのだろうか。サピアは国際補助言語に求められるものを次のように述べている。

> A standard international language should not only be simple, regular, and logical, but also rich and creative. (Sapir 1931 : 117)

サピアは簡潔性、規則性、論理性、豊富さ、創造性を兼ね備えた言語こそが国際補助言語としてふさわしいと提言したのである。

上で述べた五つの要素を兼ね備えたうえで、さらにサピアは国際補助言語は「補助的」でなければならないということを強く主張している。

> One must beware of an over-emphasis on the word 'auxiliary'. It is perfectly true that for untold generations to come an international language must be auxiliary, must not attempt to set itself up against the many languages of the folk, but it must for all that be a free powerful expression of its own, capable of all work that may reasonably be expected of language and protected by the powerful negative fact that it cannot be interpreted as the symbol of any localism or nationality. (Sapir 1931 : 113)

サピアは「国際語は、遠い将来においても補助的でなければならないし、民衆が話す多くの諸言語に対抗しようと自立を試みてはならない」と提言したうえで、「何らかの地方主義や国家の象徴として解釈されないだけの強力な否定的事実によって保護されねばならない」と主張した。国際共通語はあくまでも補助的なもので、それぞれの人たちが母語を最も大切にしたうえで使う言語でなければならないと述べたのである。国際語に母語がとってかわられることが決してあってはならないということをサピアは80年も前から指摘していたのである。

3．今日の国際英語の中にみられるサピア的視点

ここでは、約80年前に提言されたサピアの国際補助言語に対する見解が今日の国際英語の中にどのようにみられるかということについて論じていく。

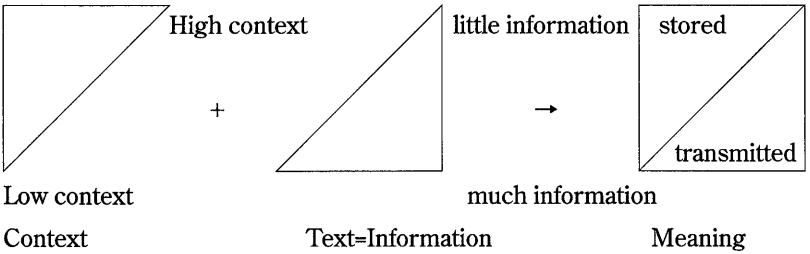
まず Bernstein の Restricted Code と Elaborated Code という概念について取り上げる。

> Restricted codes have their basis in condensed symbols whereas elaborated codes have their basis in articulated symbols. That restricted codes draw upon metaphor whereas elaborated codes draw upon rationality.
>
> (Bernstein 1970 : 164)

Code とは言語表現の中の規則を表している。Restricted Code は制限コードと訳され、圧縮された象徴を表し、すべてを言語表現にせず暗示的に表現するメタファー表現などを大切にする言語用法である。つまり Restricted Code はコンテクストに依存した言語用法を示す。日本語のようにすべてを言語表現にせず暗示的な部分を残すような言語はこの Restricted Code に分類されることになる。一方で Elaborated Code は詳細コードと訳され、明確に述べた象徴を表し、合理的に全てを言語表現する言語用法である。こちらはコンテクストから独立した言語用法を示す。英語のように、多民族が使用する言語はコンテクストの共有度が低くなり、細かな言語表現を必要とするために Elaborated Code に分類される。したがって国際補助言語はその場その場で考えだされる個性的な言語であるため、詳細な言語表現を必要とする Elaborated Code が望まれることになる。

次に、アメリカの人類学者である Hall の High Context と Low Context という概念を取り上げる。Text はことばすなわち言語表現を表し、Context とは Text を取り巻くものを表している。High Context なところ、すなわち言語以外における共有度が高い場合、Text すなわち言語表現は少なくても、伝えようとする意味は伝わる。しかし Low Context なところでは、Text を

明確にしなければ、意味は伝わらない。それを図示したものが図１にみられる。



(Hall 1983 : 61)

図１　High Context と Low Context

EIL は様々な文化の人が使用する言語であるため、言語以外における共有度が低い Low Context となる。したがって明確で詳細な言語表現を必要とするということに留意しなければならない。

世界中の言語には共通する60個の semantic primes（意味の原子）があると考えられている。その60個を挙げたものが表３である。

Universal semantic primes	
Substantive	I, you, someone, people, something, person, body, word
Determining elements	this, the same, other, one, two, some, much, all
Experiencing verbs	know, think, want, feel, see, hear
Actions and process	say, do, happen, move
Existence and possession	there is, have
Life and death	live die
Evaluation and description	good, bad, big, small
Special concepts	where, here, above, below, near, far, inside, side
Temporal concepts	when, now, before, after, a long time, a short time,

	for some time
Relational elements	kind of, part, of, very, more, like
Logical elements	if, because, not, maybe, can

(Dirven and Verspoor eds. 1998 : 132)

表3　60 universal semantic primes

何千もの複雑な意味はこれら60個の意味の原子から構成されている。そしてこの60個の semantic primes は世界的に全ての言語に共通していると考えられている。つまりいかなる言語もこの60の意味の原子をもっており、多くの言葉はこれらに分解することができるのである。したがって、国際補助言語として使用される英語も難解な単語などで意思疎通が困難になってしまう場合には、これらの60個の基本的な意味の原子に基づいて言い換えてみるという心掛けが求められる。これがサピアの提言していた国際補助言語として求められる要素の「簡潔性」という部分にみられることができる。

次に鈴木孝夫（1971）の提唱した Englic という考え方を取り上げる。Englic とは English に「～のような」を意味する接尾辞の ic をつけたもので、英語風の言葉や英語をもとにした言語という English-like language を意味している。

> 英国ではこうは言わない、米国ではそうは発音しないといった瑣末主義 particularism 完全主義 perfectionism のとりこになって、何も言えない、書けないところに追いこまれてしまう。日本人以外の多数の人々と交流する手段として、今のところ、好むと好まざるとにかかわらず、一番利用度の高い国際補助語が Englic なのである。…もっと大切なことは、お互いに勝手な自国語で話したのではまったく意思が通じないことの多い、多元的な現在の世界で、英語に近い言語としての Englic を使えば、立派に意思が通じるという認識である。　（鈴木 1971 : 5）

鈴木の提言する Englic とはまさに、サピアが国際補助言語として求められるべきなのはエスペラント語であるという視点に立ったものである。それぞ

れの文化を大切にした英語、それぞれの言語が混じったEnglicを使うことにより意思疎通することで、その言語を使う人すべてが平等になる国際共通語としての英語が出来上がると提言しているのである。また全ての人が様々な英語を認め合えば、サピアの提言したエスペラントのように言語における些細な過ちは気にする必要がないところに追い込まれてしまうという利点もこのEnglicの中には含まれているのである。

次にPeirceの記号と対象との三項関係について考察する。Peirceは記号と対象との関係において、icon、index、symbolを提言した。この文脈との関係において、Peirceの三項関係をまとめると私見によれば表4のようになる。

Icon	類像性	質、感情
Index	指標性	焦点化
Symbol	象徴性（約束性、習慣性）	論理、言語表現

表4　Peirceの記号と対象との三項関係

第一次性であるアイコンは類像性を示し、質、感情などを表している。第二次性であるインデックスは指標性を表し、その焦点となる方向性を示している。最後に第三次性であるシンボルは象徴性を示し、社会との約束事である言語表現を表す。感情のアイコン、それを指し示すインデックス、そしてそれを言語表現にしたシンボルという連続性の中で、第二次性であるインデックスは第一次性であるアイコンを含み、第三次性であるシンボルは第二次性のインデックスを含むという構造をしている。人の自然な言語習得の流れは、アイコン、インデックス、シンボルの順だが、国際補助言語としては、まずはシンボルつまりは言語表現における意思疎通を念頭におく必要がある。アイコンやインデックスの多様性を認め、母語に任せた上で、国際補助言語は社会的慣習性の高いシンボル的な言語表現が志向されることになる。これがサピアの提言していた国際補助言語として求められる要素の「論理的」という部分にみられるのである。

また国際英語はどのような位置づけにあるべきかということを、母語 / 母国語 / 国語 / 公用語という言語の役割の違いから考察する。

> 「母語」は、話者が生まれ育つ過程で自然と身につけた言語であり、その人の所属する言語共同体の言語である。言語習慣というものが無意識に獲得され永続することを考えたとき、母語が人々のアイデンティティと密接にかかわることは容易に理解されよう。
> 「母国語」は、ある人の母語が、その人の国の言語、つまり「国語」と一致していない場合に顕著化する名称である。両者が一致する場合は意識されにくい。(母語が国語と一致する場合のみ「母国語」という言い方が可能である。)
> 「国語」(national language) は政治的単位としての国家が公式に認定する言語である。よって法的な概念である。
> 「公用語」(official language) とは、多言語国家において、国の公的機関や公教育など公的領域で使用されることが法的に認定された言語である。公用語には、国際共通語という面もある。　(太田 2003 : 179 − 180)

上にみられるような言語の区分がある中で、国際補助言語は世界公用語という位置づけのもと使用されなければならない。母語や国語があったうえで、補助的な言語すなわち世界公用語としての英語が国際補助言語として求められるのである。これはサピアの提言していた国際補助言語はいかなる時も「補助的」でなければならないという考えに基づいていると考察できる。

最後に加藤周一 (1997) によるスウェーデンにおける英語の普及についての言及を取り上げる。

> スカンジナヴィアでは英語を話す人が多い。それでほとんどバイリンガルになっていて、一番英語が普及しているのがスウェーデンで、...しかしその英語は植民地帝国主義によるものではないんです。一つの外国語を徹底的に入れると、どうしても力関係でコンプレックスが生じて、いろいろな心理的問題が生じる。英国一辺倒ないしは米国一辺倒になりがちです。ところがスウェーデンではそういうところが感じられません。英語はあくま

> でも国際的なコミュニケーションの手段であって、考え方はまったく英語国から独立している。　（加藤　1997：306）

加藤はスウェーデンにおける英語教育の成功は英語をあくまでも国際コミュニケーションの手段ととらえ、その思考は英語国から独立しているためと指摘している。これがまさしくサピアの提唱するエスペラント的な国際英語の考え方なのである。国際共通語として英語をいくら使用しても、その国際英語に心つまり感情や関心まで支配されてはいけない。それがサピアの提唱したエスペラント的な国際補助言語なのである。

おわりに

本稿では、サピアの国際補助言語における視点から、今日の国際英語の在り方について考察をしてきた。今日、英語が世界共通語としての地位を確立しようとしていることはまぎれもない事実である。しかしその国際共通語としての英語はまだ完全な形としては確立されておらず、今もなお議論の余地が多分にある。これからの国際英語の中に取り入れることができる要素がサピアのエスペラント的視点の中には多く存在する。サピアが国際補助言語としてエスペラントのような人工語が適切であると述べた理由は、人工語であれば全ての人に平等な言語となり、発言における過大なプレッシャーや失言を気にせず、多くの人々と意思疎通が可能になるということにある。サピアは国際英語は常に補助的でなければならないと強く主張した。それは国際補助言語は全ての人に平等な言語にならなければならないというサピアの理念に基づいている。国際共通語は全ての人にとって平等でなければならないということを80年も前からサピアは見通していたのである。

本稿は、京都女子大学英文学会2010年度大会（2010年10月30日）における発表原稿に加筆、修正を施したものである。

References

Bernstein,B. (1970) *Social Class, Language and Socialization*. In: Pier Paolo Giglioli (ed.), *Language and Social Context*. New York: Penguin.

Dirven, R. and M. Verspoor, eds. (1998) *Cognitive Exploration of Language and Linguistics*. Philadelphia: John Benjamins.

Hall, E. T. (1983) *The Dance of Life. The Other Dimension of Time*. New York: Anchor Books.

Kachru, Y. and L. E. Smith (2008) *Cultures. Contexts, and World Englishes*. London: Routledge.

加藤周一 (1997)「日本にとっての多言語主義の課題」三浦信孝編『多言語主義とは何か』藤原書店

Leach, E. (1981) 青木保・宮坂敬造訳『文化とコミュニケーション』 紀伊国屋書店

Lee, P. (1996) *The Whorf Theory Complex : A critical Reconstruction*. Amsterdam : John Benjamins.

三浦信孝 (1997)『多言語主義とは何か』 藤原書店

中西満貴典 (2003)「国際英語ディスクール編成の記号学的考察」『記号学研究』23：169－186.

太田智加子 (2003) 「グローバル化と言語の多様性」山梨 正明、有馬 道子　編『現代言語学の潮流』：勁草書房

Peirce, C.S. (1931－58) *Collected Papers*. Cambridge, Mass. : Harvard Univ. Press.

Rosch, E. (1975) "Cognitive reference points". *Cognitive Psychology* 7: 532－547.

Sapir, E. (1931) "The function of an international auxiliary language" *Psyche* 11 in D.G. Mandelbaum, ed. 1949: 110－121.

Sharifian, F. (2009a) *English as an International Language Perspective and Pedagogical Issues*. Bristol: Multilingual Matters.

鈴木孝夫 (1971)「English から Englic へ」『英語教育』10：4－5.

Whorf, B. Lee. (1979) "Benjamin Whorf Papers" in Penny Lee, 1996 : 251－280.